

棟方志功 と 河井寛次郎

日本民藝館
所蔵品を
中心に

民芸運動の創始者として世界的に知られる柳宗悦(1889-1961)が創設した日本民藝館には、その考えに賛同し、支えた個人作家の作品が収蔵されています。

柳の思想に共鳴した陶芸家・河井寛次郎(1890-1966)と板画家・棟方志功(1903-75)は、よき協力者として柳を实践面で支えた作家たちでした。柳が唱えた「民芸」の考え方は、さまざまな人々や社会に影響を与えましたが、全国各地の職人たちが作り上げた「もの」の美しさから学び、尊んだ河井や棟方のような個人作家の存在は、民芸運動の推進役となって活動を支えました。

河井は1921(大正10)年に中国をはじめとする古陶磁の技法に精通した新進の陶芸家として登場しました。しかし、自らの個展開催中に柳が朝鮮半島で収集した李朝(朝鮮時代 1392-1910)の陶磁器の展覧会を見たことによって、技術偏重の姿勢を反省するようになりました。やがて二人は出会い、河井の後輩であった陶芸家・濱田庄司(1894-1978)とともに「民芸」という言葉を創案しました。

1936(昭和11)年、民芸運動の拠点として東京・駒場に日本民藝館が開設されます。民藝館の建築中に棟方は当時としては大作の板画《大和し美し》をきっかけに柳たちと出会いました。その後、制作のジャンルは異なりながらも河井と棟方は生涯を通して、師弟として相互に影響を与え合うこととなります。河井と棟方、そして柳の交流は日本民藝館のあゆみそのものでもあったのです。

日本民藝館が所蔵する河井と棟方の作品は、柳という稀有な思想家がみずからの眼によって収集し、展覧会や出版物で紹介した作品が中心です。その中には、棟方が河井に捧げた板画《鐘溪頌》をはじめ、二人の芸術家を語る上で欠かせない作品が数多くあります。また、棟方の作品は柳の案によって河井、濱田をはじめとする個人作家や職人たちの協力を得て表装が施されたものもあり、他のコレクションには見られない特徴となっています。

2015年は棟方の歿後40年、2016年は日本民藝館の創設80周年であり、河井の歿後50年です。本展は日本民藝館が所蔵する二人の芸術家の貴重な作品を中心とした約240点によって、日本の美術史上稀な芸術の共鳴と、その機会を生み出したひとりの思想家の眼を紹介するものです。

*棟方志功は、板の生まれた性質を大事に扱い、木の魂をじかに生み出すために、「板画(はんが)」という言葉を用いています。

河井寛次郎

1_《碎紅芒目(さいこうのぎめ)草花文花瓶》1920(大正9)年頃 河井寛次郎記念館蔵 2_《鉛釉象嵌大皿》1930(昭和5)年 日本民藝館蔵 3_《海鼠袖扁壺》1937(昭和12)年 日本民藝館蔵 4_《辰砂丸紋角瓶》1940(昭和15)年 日本民藝館蔵 5_《白釉変型面取扁壺》1942(昭和17)年 河井寛次郎記念館蔵 6_《三色打葉扁壺》1963(昭和38)年 河井寛次郎記念館蔵

棟方志功

1_《火の願ひ板畫欄》より「鐘溪室の欄」1947(昭和22)年 日本民藝館蔵 *京都の河井寛次郎の室「鐘溪室」を描いた板画。画中の人物は左から河井寛次郎、柳宗悦、濱田庄司。2_《華嚴譜》より「十八 風神」1936(昭和11)年 日本民藝館蔵 3_《鬼門踏板畫譜》より「真黒童女」1937(昭和12)年 日本民藝館蔵 4_《鐘溪之神》1945-50(昭和20-25)年頃 河井寛次郎記念館蔵 5_《大和し美し 下巻》より「後建命(やまとたけるのみこと)」1936(昭和11)年 日本民藝館蔵



1.



2.



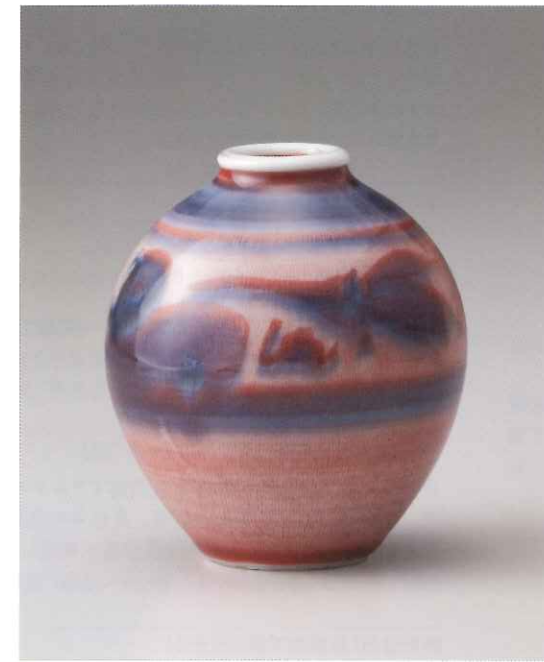
3.



4.



5.



1.



2.



3.



4.



5.



6.